



ロバート・カーターとコロトマンの「家族」

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-06-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 滝野, 哲郎 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00002673

ロバート・カーターとコロトマンの「家族」

滝野哲郎

タバコ・プランターが台頭していたヴァージニア植民地において、18世紀初頭から約30年間、誰にもまして富を蓄積し強い政治権力を握っていたのが、ロバート・カーター(1663-1732)である。当時、彼は“キング”・カーターと呼ばれていた。

カーターは、若くして、莫大な遺産を手に入れた。父ジョン・カーターは、1640年ごろにイギリスからヴァージニアに移り住み、土地を獲得して財を成し、植民地政治にもかかわって、カーター家の地歩を固めた。長男ジョンがその資産の多くを引き継いだ、1690年に他界してしまったため、次男であったロバートがその残された財産を受け継ぐことになった。ロバート・カーターは、この遺産をもとにして精力的に土地を取得し、プランテーションを拡大し、急速に収益を増やしていった。地域社会では、治安判事、教区委員、民兵隊大佐、代議員を務め、植民地政治においては32年間にわたって参議会の一員、のちにその議長となり、イギリス本国からの総督が1年あまり不在となったときには総督代理として植民地の統治にもあたったのである。

カーターが屋敷を構えていたのは、植民地の首都ウィリアムズバーグから北東50キロにあるランカスター郡コロトマンである。父親が1650年ごろに移り住んだこの地は、カーターが生まれ育ち、若い頃に渡英した6年間のあと、晩年まで暮らしたところである。ここで彼は、2度結婚し、多くの子どもを育て上げた。またこの場所には、タバコを栽培する広大なプランテーションがあって、多数の奴隷が労働力として使われていた。

コロトマンで暮らすカーターの様子について知る手がかりとな

るものは、当時彼が書き送った数多くの書簡である。現存しているもののほとんどは1720年代以降のもので、そこには60歳代の頃のカーターが、家族・使用人・奴隷とかかわりながら暮らしている様子が記されている。カーターは、妻や子どもだけでなく、コロトマンで生活する使用人や奴隷すべてを含めて「自分の家族」という。彼は、コロトマンの主人としてこの「大きな家族」の「世話」をしていたのである。小論では、ヴァージニアのプランターとして富と権力を極め“キング”と呼ばれたカーターが、コロトマンでいかに「家族」の「世話」をしていたかについて1720年代の書簡を中心に考察してみたい。¹

1

1720年代、コロトマンで暮らすロバート・カーターのもとには多くの子どもがいた。1720年、その前年に2人目の妻に先立たれた57歳のカーターには、2度の結婚によって生まれた10人の子がいた。最初の妻ジュディス・アーミステッドとの11年の結婚生活の間に5人が生まれ、うち3人が成人した。2人目の妻ベティ・ウィリスは、20歳年下で、17年間に10人を出産したが、うち3人は母親よりも早くこの世を去った。つまり1720年、カーターには、2歳のジョージ、5歳のルーシー、8歳のメアリ、10歳のランドン、13歳のチャールズ、16歳のロバート、18歳のアン、そして先妻の子である24歳のジョン、そしてすでに結婚していた25歳のジュディスと28歳のエリザベスがいたのである。カーターには、これから「面倒を見なくてはならないとても多くの家族」がいたのである。²

妻を亡くしたカーターにとって、子育ては大きな関心事であった。彼は、たえず子どものことに注意を払い、彼らが勉学に励むことを強く望んだ。そして息子たちは教育のために次々とイギリスに送られた。その際、カーターが留学にかんする世話を依頼したのが、タバコの取引をしていたロンドンの商人たちであった。当時、商人と

の書簡の中で、経済情勢や売買にかんする内容のほかに、息子たちのことをしばしば話題にしているのである。

カーターにとって、何より気になることは、遠く離れて暮らす息子たちが元気で勉強に取り組んでいるかということであった。ケンブリッジのトリニティ・カレッジに在学していた長男ジョンが、留学して5年目、天然痘に感染したと知ったときには、「ショッキングな知らせである。息子が死ぬかもしれない天然痘にかかるなんて」と、抑えきれぬ不安な気持ちを打ち明けている。まもなく息子の回復を伝える手紙を受け取り安堵するが、当の息子本人からは何の音沙汰もない。「元気になったのに、まったく連絡もしてこない。これまでいろいろと気遣ってきた父にもう少し手紙をくれてもよいのだが」。³

息子たちが暮らすロンドンには、さまざまな娯楽や社交の場があり、贅沢品があふれて、学生である彼らにとって誘惑の多い場所であったにちがいない。1720年、ジョンが華美な服装に興味を奪われているとの報告を受け取ったときには、「決められた支給額以上に支出することのないように」と儉約を促している。そしてその翌年にも「ロンドンのいろいろな楽しみには惑わされずに、やるべきことに励むように」と諭している。長男のあと、ロバート、チャールズ、ロンドンの3人もイギリスに送られ、彼らのことで頭を悩ますことも多かった。「息子ロンドンの出費には本当に驚かされる。16歳であるのに、この1年3か月で323ポンド2シリング11ペンスも使うなんて考えられない」。また、孫のルイス・バーウェルにも忠告することがあった。長女エリザベスの子であったルイスは、最近父親を亡くし、カーターが代わりに面倒を見ていたのである。「愚かなことをやめて、目的をもって学ぶことを願っている。あなたの父は立派な人物で、あなたが教養あるジェントルマンになることを願ってイギリスに留学させたのである」。だがその後も、本人の行動は改まることはなく、カーターは送金を止めて帰国を命じた。この時期、カーターは、商人からの報告によって遠くの息子たちの様子を把握し、彼ら

を「世話」することに親としての責任を強く感じていたのである。⁴

息子が留学を終えて帰国すると、カーターは、彼らに土地と財産を準備し、役職と結婚相手を見つけようとした。1727年、ヴァージニア植民地総督のオークニー伯爵への書簡には、次のような記述が見られる。「次男ロバートは、いまは一緒に暮らしているが、彼にはポトマック川の土地を与えようと思う。そのあと、いずれ三男チャールズにはマンズの領地を譲るつもりである」。さらにその書簡で、これまで次男が就いていた海軍の役職を三男に引き継がせることができるように支援を依頼している。役職とともに、カーターは、結婚相手も用意した。長男の相手はエドワード・ヒル大佐の娘、次男には参議会のウィリアム・チャーチルの娘というように、息子たちを次々と有力者の娘と結婚させたのである。⁵

このように、60歳代のカーターは、子どもたちの面倒をいろいろとよく見ていた。息子たちをイギリスに送ったのは、彼自らが渡英体験を通して留学の意義を認識し、彼らにもイギリスで法律や経営を学ばせることによって、プランターとして必要な知識と能力を身につけさせようとしたからであろう。たとえ息子が、父が望むように勉学に励むこともなく、浪費を繰り返すばかりであっても、帰国後は、一人前のプランターとして生計が立てられるように十分な援助を与えた。娘たちについても、将来プランテーションの女主人として振舞えるように育て、そしてカーター家に釣り合うような家柄の結婚相手を見つけた。娘たちの相手となったのは、バーウェル家、ペイジ家、ハリソン家、フィッツヒュー家といった裕福な家の息子たちであった。これらの子どもたちの結婚によってできた姻戚関係を通して、カーターは、植民地の有力者との結びつきを強め、ヴァージニア社会におけるカーター家の存在を確固たるものにしていった。子どもの「世話」に熱心に取り組んだことは、自ら築いた財産と権力を保持することにもつながったのである。⁶

2

カーターは、コロトマンに6千エーカーの土地を所有し、多数の奴隷と使用人を使ってプランテーションを経営していた。この地は、肥沃な土壌と温暖な気候に恵まれ、ラパハノック川の河口近くに位置して水運もよく、プランテーションには適したところであった。カーターは、ここで、商品作物であるタバコを栽培していた。もちろん、コロトマンで消費する食料を確保するため、小麦・豆・トウモロコシの畑もあり、豚や牛も飼育されていたが、タバコが彼にとって大きな収益を生む大切な作物であった。彼は、自分が出荷するタバコには自負を抱いていた。「私はヴァージニアでは誰にも劣ることのない良質のタバコをつくることで名を知られてきた」。そして、「私ほど、タバコの扱いに注意を払うものはいないであろう。ここには、よい土地とよい道具があつて、私がこの仕事を熟知していることはあなたもよくご存知であろう」。取引相手へのこの書簡には、品質にたいする自信とともに、それに見合った価格を望む経営者としての思いもよくあらわれている。⁷

プランテーションを経営するためには、つねに必要な人材を確保しておくことが重要であった。カーターは、数人の管理人と多数の奴隷監督人を雇っていた。奴隷監督人は、プランテーションで奴隷の労働を監視し、管理人は、カーターが所有するプランテーションを見てまわり、監督人に会い、奴隷の様子や仕事の進み具合を確認してカーターに報告した。カーターは、管理人に詳細にわたって指示を与え、プランテーションを効率的に運営して、収益を上げようとしていた。また、このような管理にかかわるもののほかに、コロトマンでの生活を維持するためにさまざまな職種の使用人も雇っていた。これらの職人の多くは、イングランド、ウェールズ、スコットランド、アイルランドからの年季契約奉公人であった。1727年、カーターはイギリスの商人に次のような求人依頼をしている。「庭師、仕立屋、床屋がグラスゴーで見つからなければ、エジンバラかダブ

リンでもかまわない。ただアイルランド人にはあまりよい印象をもっていない」。カーターが望むような有能で勤勉な職人がくればよいが、中にはいろいろと問題を起こすものもいた。倉庫や貯蔵庫から物品や食料を盗むもの、また私生児を出産した若い女性もいた。そして使用人が起こす問題を解決し処理するのも、カーターの仕事であった。⁸

プランターであったカーターにとって、タバコ栽培に従事する奴隷は大切な労働力であり、その数をつねに十分に確保しておくことが必要であった。1720年代、ヴァージニアでは、プランテーションの拡大にともなって奴隷が増加し、植民地人口の約20%をしめるほどになっていた。当時の有力プランターたちと同様、カーターも、精力的にプランテーションを広げ、奴隷の数を急速に増やしていった。

カーターは、ラパハノック川のコロトマン沖に到着する奴隷船から奴隷を購入していた。当時、アフリカからの黒人を積んだ奴隷船は、地域の有力プランターのところで数週間停泊し、その近辺のプランターたちと奴隷の取引をおこなっていた。カーターは、まず自分の奴隷を選び、購入したが、そのおよそ7割は男性奴隷であった。彼は、さらにほかのプランターの取引を仲介し、売り上げの約1割を手数料として受け取っていた。このような取引に携わっていたのは、ポトマック川ではトマス・リー、ジェイムズ川ではウィリアム・バード二世といった有力プランターたちである。カーターの日記には、1727年5月、奴隷船が3週間停泊していたとき、毎日午後、乗船して売買に立ち会ったときの様子が記されている。ほぼ毎日、1人か2人の買い手があらわれ、5人前後の奴隷が売買されていた。⁹

購入した奴隷の扱いにはいろいろと配慮が必要であった。コロトマンに連れてゆき、衣服を与え、彼らに英語の名前をつけた。「私はまず黒人に名前をつけた。その名前で彼らのだいたいの大きさがわかるのである。黒人をその名前で繰り返し呼び続けると、彼らは自分の名前を覚え、すぐに返事するようになる」。アフリカから到着し

た黒人を、早く労働力として利用できるようにすることが必要であったが、彼らは、長期間にわたり劣悪な状態の奴隷船で運ばれてきたので心身ともに衰弱し、環境の変化に順応するのも容易ではなく、病気になるものやマラリアなどで死亡するものもいた。1729年の書簡には、「新しく購入した働き手は、1人を除いてうまく適応できずに病に伏せっている。彼らが体力を回復し、農場へ連れて行けるようになるまで、忍耐強く待たねばならない」と記している。監督人には、「新入りのものは手厚く扱うように」という指示を出し、彼らがプランテーションの生活に早く慣れるように配慮することを求めた。カーターは、購入したばかりの貴重な財産である奴隷を失うことのないように細心の注意を払っていたのである。¹⁰

カーターは、彼が所有する奴隷たちが病にかかることなく労働できる状態を保つために、衣服・住居・食事について気を配った。グラスゴーの商人への注文書には、「足の大きい黒人がはける大きな靴下 6 ダース、黒人がかぶるキルマーノックの分厚く大きい帽子 5 ダース」が含まれている。住居については、「奴隷小屋と監督人の住まいに屋根裏をつくるように言った。住居の暖かさのためだけでなく、小麦を貯えるためにも必要である」と記している。また、「奴隷たちのためにとてもよい小屋を建て、ベッドの高さが地面から 1 フィート半になるようにさせた」。大雨や川が増水したときのためであろう。食事については、栄養面にも配慮していたようである。「レッドオークかパークからもってきた豚肉を奴隷たちに食べさせたいと思う。そうすれば奴隷たちもたまにはその脂肪をトウモロコシにつけて食べることができよう」。辛い仕事に従事したもの、遠く離れたところまで仕事に行かされたものには、多めの食料が与えられた。

「重労働をやり終えたものには、週に 1、2 回肉 1 ポンドを与えた」。彼は、管理人に、衣食住において「奴隷たちが心地よく生活できるように」することを求めている。¹¹

奴隷の状態をつねに把握しておくことは大切なことであった。「つい先頃、ウェストモアランドでは私の家族がみんな病気もせず

元気に過ごしているという知らせが届いた」。このように奴隷が元気で仕事が進むときもあったが、病気がはやるときもあった。1720年、「この冬、多くの黒人を失った。新しい黒人を入れるのにはかなりの費用がかかる」という。1721年、監督人にたいして、病気の奴隷はすぐに医師の診察を受けさせるようにという指示を出している。「トマス・ターナー医師が私の家族を診てくれるので、必要なときには、必ず彼を呼ぶようにしてもらいたい」。だが、厳しい寒さに見舞われた1727年、「この冬、かなり多くの奴隷を失ったので、新たに黒人を多数購入しなくてはならない」事態が生じた。このときは、70人ほどが病死したため、春には80人を購入することになった。カーターは、「厳しい寒さの中で奴隷を働かせた監督人の不注意と残酷さ」に腹を立てる。貴重な財産である奴隷が死亡することは大きな損失であるだけに、彼らが労働に従事できる健康状態を維持することに彼は苦心したのである。¹²

奴隷をプランテーションでの生活に順応させ、仕事を順調に進めるための方策の一つが、奴隷たちの結婚であった。これにたいする考え方はプランターによって異なったが、カーターのところでは、多くの奴隷が結婚して家庭をつくっていた。当時、カーターの所有する男性奴隷は、女性より数が多く、結婚できないものもいたが、成人女性奴隷のほとんどは結婚していた。夫婦になれば、住居を与えられ、同じプランテーションで働けることが多く、そして子どももできた。こうして家庭を築けば、奴隷は自らの境遇にそれほど強い不満を抱くこともなく、逃亡を試みることもなくなり、家族のために真面目に労働に従事するようになるとカーターも考えたのであろう。¹³

奴隷労働力をいかに効率的に活用するかもプランターにとって大事なことであった。カーターのところでは、多くのプランターと同様、奴隷を15人から25人ほどの単位にして、畑で同じ作業を同じペースでさせていた。この方法であれば、監督人が監視しやすく、最近アフリカから来た奴隷も仕事に早く慣れることができる。また、

奴隷の中から、作業の手順をよく心得、周りからも頼られているものを選び、監督人を補佐する役割を与えた。この「信頼できる黒人」は、自分の住居をもらい、監督人と同じ量の食料が与えられた。監督人のもとで「信頼できる黒人」を使うことはよく見られたが、カーターや当時のヴァージニアのプランターは、その「黒人」に監督人の代わりをさせることさえあった。カーターは、プランテーションの管理体制を有効に機能させることを考えていたのである。¹⁴

奴隷たちの結婚と家庭、そして「信頼できる黒人」の存在は、プランテーションの管理を容易にし、奴隷の生活に規律をもたらすのに効果的であったことはたしかである。しかし、奴隷の中には逃亡を試みるものもいた。とくにアフリカから連れて来られて間もない黒人は、束縛された境遇に耐えかね、コロトマンを抜け出して近辺の森に身を潜めることがよくあった。彼らの多くは、しばらくすると戻ってきた。カーターによると、「森での苦労を十分に味わえば、腹を満たすことのできるこの場所から離れることはないであろう」。彼は、来て間もない奴隷が逃げ出したときには、「優しく」接してここでの生活への適応を促すのがよいと考えていた。¹⁵

当時ヴァージニアでは、奴隷人口の増加にともなって、しだいに奴隷にかかわる問題が生じるようになっていた。奴隷の不服従、盗み、逃亡などにたいして、プランターは何らかの対処を講じなければならぬ。カーターのところでも、逃亡するもの、反抗的な態度をとるものがいれば、必要に応じて鞭打ちや烙印が罰として与えられた。だが、それでも「どうしようもない」奴隷にはさらに厳しい罰が与えられた。1727年、逃亡を何度も繰り返す奴隷にたいして、カーターは「この奴隷を更正させる方法は足指の切断しかないであろう」と考え、そのために必要な許可を裁判所に取りに行くように管理人に指示を出している。「私は、この方法で多くの奴隷の逃亡癖を直してきた」ともいう。このような処置は、その奴隷の矯正のためだけでなく、ほかの奴隷にたいする見せしめとしての効果もあった。カーターは、規律を乱すものに残酷な罰を与えることで、プラ

ンテーションの管理の徹底を目指したのである。¹⁶

カーターを困惑させた事件の一つに、コロトマンの奴隷と白人女性の関係があった。「キリスト教徒で独身の白人女性」プリシラ・パーマーが、「カーターが所有する混血奴隷ビリーと関係し、奴隷小屋のベッドにいるところを見つけた」のである。カーターは、彼女がビリーを連れて逃げ出すかもしれないと考え、裁判所に訴える。1723年3月、彼女は、ランカスター郡の監獄に収容され、そこで男児を出産した。カーターをはじめ教区委員や裁判所は、プリシラにたいする処罰、生まれた子の扱いに苦慮し、このような問題にいつそうの注意を払うようになった。¹⁷

これまで見てきたように、カーターは、自分が所有する奴隷の状態をよく把握し、そしてその「世話」をよくするプランターであった。ただ、管理人と監督人にとってはおそらくあれこれ口うるさい主人であったであろうし、また奴隷にとってもけっして優しい主人というわけではなかったであろう。たとえカーターが礼拝に欠かさず出席し、教区委員も務める熱心なキリスト教徒であったとしても、「どうしようもない」奴隷に過酷な罰を与えることに躊躇することはなかった。彼にとって、キリスト教の信仰と奴隷の扱いには、矛盾が生じることもなかったのかもしれない。結局のところ、彼が奴隷の「世話」をするのは、奴隷が貴重な財産であり、その労働が彼の経済的な基盤となっていたからにほかならない。カーターは、実利を重んじて奴隷や使用人を使い、自らの事業を急速に拡大して巨額の財産を築いた“キング”であったのである。

3

晩年に至るまで、カーターは、「家族」の「世話」を日々の大切な仕事としていたにちがいない。1732年8月、69歳のカーターは、いつものように、ラパハノック川に停泊していた奴隷船に乗り込み、新たな「家族」数人を購入し、コロトマンの屋敷に戻ってきた。だ

がそのとき、彼は赤痢に感染していた。そしてその3日後、息を引き取った。財産に恵まれた生涯を送ったカーターであったが、けっして仕事を管理人に任せきりにすることはなく、貴族のように有閑な生活を楽しむこともなく、自ら「大きな家族」の維持に努めてきた。プランターの仕事とは、ウィリアム・バードも言うように、「すべてのものが決められた仕事をするように、万事が順調に進むように、注意を払わなくてはならない」。カーターは、プランテーションの管理と運営において巧みな手腕を発揮することによって、大きな収益を生み出すことに成功したプランターの一人であったといえよう。¹⁸

カーターが他界して数週間後、フィラデルフィアの『アメリカン・ウィークリー・マーキュリー』にその記事が掲載されたが、それによると、彼は、「3万エーカー以上の土地、千人を超える黒人、そして現金1万ポンドという莫大な財産を子どもたちに残して世を去った」。カーターは、長年にわたって多くの子どもを育て上げるとともに、彼らに多額の財産を残したのである。彼が蓄積した財力、そして子どもたちの結婚による有力家系との姻戚関係・血縁関係によって、彼はヴァージニアにおける一族の確固たる基盤を築くことになった。カーターの没後、その子孫は繁栄し、多数の政治家や著名人が輩出した。その中には、3人の独立宣言署名者、ウィリアム・ヘンリー・ハリソンとベンジャミン・ハリソンという2人の大統領、南北戦争時の南軍指揮官ロバート・E・リー、10人の州知事、多数の連邦議会議員がいる。そして現在、カーターの子孫は3万人におよぶとさえ言われている。

注

- 1 ロバート・カーターの伝記的事実については、以下を参照。Louis B. Wright, *The First Gentlemen of Virginia: Intellectual Qualities of the Early Colonial Ruling Class* (Charlottesville: Univ. Press of Virginia, 1964), 248-85; Katharine L. Brown, *Robert "King" Carter: Builder of Christ Church* (Irvington, Va.: Historic Christ Church, 2001). カーターの書簡と日記については、次のものを使用する。*The Diary, Correspondence, and Papers of Robert "King" Carter of Virginia, 1701-1732*, ed. Edmund Berkeley, Jr., Jan. 2007, Univ. of Virginia, 15 Dec. 2007 <<http://etext.virginia.edu/users/berkeley/>>. 出版されたものとしては、*Letters of Robert Carter, 1720-1727: The Commercial Interests of a Virginia Gentleman*, ed. Louis B. Wright (San Marino, Calif.: Huntington Library, 1940).
- 2 "To the Earl of Orkney," 12 Dec. 1727.
- 3 "To Micajah and Richard Perry," 3 Oct. 1717, 10 Dec. 1717.
- 4 "To John Carter," 13 July 1720, 27 May 1721; "To William Dawkins," 16 May 1727; "To Lewis Burwell," 22 Aug. 1727.
- 5 "To the Earl of Orkney," 12 Dec. 1727. Kathleen M. Brown, *Good Wives, Nasty Wenches, and Anxious Patriarchs: Gender, Race, and Power in Colonial Virginia* (Chapel Hill: Univ. of North Carolina Press, 1996), 252.
- 6 Alan Simpson, "Robert Carter's Schooldays," *Virginia Magazine of History and Biography* 94 (1986): 161-88. Kathleen M. Brown, 256.
- 7 "To John Falconar," 16 Dec. 1727. Lorena S. Walsh, *From Calabar to Carter's Grove: The History of a Virginia Slave Community* (Charlottesville: Univ. Press of Virginia, 1997), 80-93.
- 8 Edmund Berkeley, Jr., "Robert Carter as Agricultural Administrator: His Letters to Robert Jones, 1727-1729," *Virginia Magazine of History and Biography* 101 (1993): 275. "To John Stark," 27 June

1727.

- 9 “Robert Carter Diary,” 1727-Jan. 1728. Gerald W. Mullin, *Flight and Rebellion: Slave Resistance in Eighteenth-Century Virginia* (New York: Oxford Univ. Press, 1974), 13-14.
- 10 “To Robert Jones,” 10 Oct. 1727. Allan Kulikoff, *Tobacco and Slaves: The Development of Southern Cultures in the Chesapeake, 1680-1800* (Chapel Hill: Univ. of North Carolina Press, 1986), 326.
- 11 “To John Stark,” 27 Sep. 1727; “To Robert Jones,” 10 Oct. 1727; “To [William Camp],” 27 Aug. 1729.
- 12 “To [Mann Page],” 3 March 1721; “To William Dawkins,” 13 July 1720; “To John Johnson,” 22 June 1721; “To John Stark,” 19 May 1727.
- 13 Kulikoff, 356-58.
- 14 Walsh, 86.
- 15 “To Robert Jones,” 10 Oct. 1727.
- 16 “To Robert Jones,” 10 Oct. 1727. Walsh, 83. Kathleen M. Brown, 351-52.
- 17 Katharine L. Brown, 55.
- 18 “To Charles Boyle, Earl of Orrery,” 5 July 1726, *The Correspondence of the Three William Byrds of Westover, Virginia, 1684-1776*, ed. Marion Tinling, vol. 1 (Charlottesville: Univ. Press of Virginia, 1977), 355.